

## 令和四年度 入学試験 第一回 国語

京華女子高等学校

令和四年二月十日

□ 漢字に関する以下の問いに答えなさい。

※答えは解答用紙にはつきりと書きなさい。

問一 ①～⑥の——線部のカタカナをそれぞれ正確な漢字に直しなさい。

- |   |            |   |             |   |            |
|---|------------|---|-------------|---|------------|
| ① | ヘイボンな日常。   | ② | 需要とキョウキュウ。  | ③ | テンボウ台にのぼる。 |
| ④ | トウカクをあらわす。 | ⑤ | いさぎよく責任をオウ。 | ⑥ | テアツい看護。    |

問二 ①～⑥の——線部の漢字の読みをそれぞれひらがなで答えなさい。

- |   |           |   |               |   |             |
|---|-----------|---|---------------|---|-------------|
| ① | 無性に腹が立つ。  | ② | 校舍に隣接する建物。    | ③ | 文化祭の企画に携わる。 |
| ④ | 怠けずに取り組む。 | ⑤ | 普段から重宝している道具。 | ⑥ | 分別のある行動。    |

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私たちがふつうに生きていこうとするときに直面するさまざまな問題を考えるために、調べることが大いに武器になる。社会全体として解決しなければならぬ問題を考えるために、調査が活用できる。調査をうまく使いこなすことにより、私たちが私たちにらしく生きていくことができる。この本は、そう主張したいと思います。

ちよつと調べればわかるはずなのに、調べないまま的外れな発言がなされている場面に、私たちはよく出くわします。「ちよつと調べれば」には、ちよつと文献に当たれば、もあるでしょうし、ちよつと詳しい人に聞いてみれば、もあるでしょう。ちよつと聞き取りをしてみれば、もあるでしょうし、ちよつと統計を見てみれば、もあるでしょう。

ちゃんと調べれば、解決の道筋が見えてくるはず。反対に、調べないまま解決策を考えると、的外れでとんでもないことになるかもしれない。問題はさらにこじれてしまうかもしれない。この本では、その「ちゃんと調べる」の道筋を、解説していきたいと思えます。

しかし、調査、というと、しりごみ<sup>①</sup>してしまいう人も少なくないかもしれません。調査なんて、大学の先生とか、研究所の研究者とか、そういう人たちがするものだ、と多くの人が思い込んでいるように思えます。

□ a、「調べる」ということは、私たちが生きていくうえで、日常的に行っていることです。私たちは、何かをするときに、どこかで聞いた話とか、何かで勉強したこととか、テレビで聞いた話だとか、そういったものをもとに行動しています。たしかに、調べて行動しているのです。ただし、この、ふだん行っている「調べる」は、不十分だったり、間違った情報だったりすることもあります。

不正確な情報に振り回されることを回避し、「ちゃんと調べる」ことを身につける。それはどうすればできるでしょうか。

正確なことを調べるのは、じつは思うほどむずかしくありません。私たち一人ひとりが生きていくなかで必要なことを調べる。さらに、よりよい社会をつくっていくために調査する。この本では、その具体的な方策を検討していきたいと思えます。

□ b、自分が暮らす町の高齢者福祉の状況はどうなっているのか。一人暮らしの老人は安心して暮らしているのか。貧困世帯はどういう困難をかかえているのか。また、近所の携帯電話基地局のアンテナは安全なのか。「空間除菌」グッズは本当に効果があるのか。あるいは、最近起きた災害の被害はどうなっているのか、復興はうまくいっているのか。さらには、自分の暮らす町ではこれからどんな環境保全を考えていくことが必要なのか。この町の農業の現状や課題はどういったものか。

私たちの社会がかかえている問題を解決する、私たちがより安心して暮らせる社会をめざす、そうしたことのための「調査」が、この本で主に想定されているものです。□ c、同様の調査は、もつとさまざまな場面で使えます。職場や大学、社会教育などで使われる場面も十分想定しながら、この本を書きました。

しかし、市民による調査って言ったって、調査は本来は専門家が行うはずのもので、市民が行うのは所詮その二番煎じじやないか。そういう見方があるかもしれません。

しかし、この本で主張したいのは、そうではないのではないか、d<sup>④</sup>、市民による調査こそが、ある意味、本当の調査研究ではないか、ということです。これはどういうことでしょうか。

専門家は、その専門領域で議論になっていること、わからないことを、追求しようとしています。e 今日、専門家はより細分化され、それぞれの専門家はその細かな専門のなかでの「正しさ」や「厳密さ」を追求します。専門家集団(学界)のなかで評価されるのが、彼らには重要です。それはときに、私たちの本当の必要から離れた研究かもしれませんし、私たち市民にとってはあまり意味のない「正しさ」や「厳密さ」かもしれません。

一方、市民による調査は、自分たちが自分たちの生活にとって必要なこと、自分たちの社会にとって重要なことをやろうとします。そして、具体的な解決策をめざします。社会を直接相手にするわけですから、その「正しさ」や「厳密さ」は、専門家集団によってではなく、社会によって検証されます。

さらに、市民による調査は、調査をする人と問題を解決しようとする人とが同じである、あるいは近いところにいる、という最大の特徴もついています。調べて発表して終わり、ではなく、調べるなかでやらなければならないことが出てきたら、どんどん実践する、ということも、市民による調査の有効性を示すものです。

このあたりのことを深く考えた一人に、原田正純さん(一九三四〜二〇一二年)がいます。<sup>注2</sup> 水俣病患者に長く寄りそう医師であり研究者であった原田正純さんは、専門家より住民のほうが正しかった、というエピソードを披露しています。

「水俣で、生まれてきた子が発症しているとわかった時、医学者はみんな、『母親の胎盤を毒物が通るなんてありえない』と考えた。でも、お母さんたちは『私から水銀が行ったに違いない』と一発で言い当てた。胎児性水俣病の発見です。母親は専門家と違っていい。それを『あなた方は素人。俺たちは専門家だから正しい』という風にやってきた」(『朝日新聞』二〇一一年五月二五日のインタビュー記事より)。

【ア】毒物が胎盤を通過して子どもに移るといえることはないと考えられていたからです。

【イ】原田さんのこのインタビューが行われたのは、二〇一一年五月でした。

【ウ】生まれながらの水俣病である胎児性水俣病の存在は、最初専門家のあいだでは疑われていました。

【エ】結局は、そちらのほうが正しかったのです。

【オ】しかし、母親たちは、赤ん坊の様子、自分たちの生活実態、まわりの状況、さまざまなものから、自分の子どもは水俣病以外の何物でもない、と考えました。

同年三月一日の福島第一原発事故のあとです。原田さんは福島原発事故を意識して、この発言をしています。「専門家」たちが「安全」だと言いつづけた原発が事故を起こし、さらにその放射能の影響についても「専門家」たちが「たいしたことはない」と言う。そういう状況を前に、これは水俣病の繰り返しだ、と原田さんは発言しました。

「過ちを繰り返さないためには、現場を離れることなく、<sup>⑥</sup>風通しを良くして、現場から学ばなければならない」。そう原田さんは言います。「(水俣病の問題を)狭い医学に閉じ込めてしまった教訓や『素人』の指摘がしばしば正しかったことから考えれば、バリアフリーの学問、専門の枠組みを超える学問、そして『素人』『専門家』の枠組みをも超えた市民参加の開かれた学問でありたい」(原田 2007: 280)。

市民が参加する開かれた研究、専門分野に閉じこもらない研究こそが、問題の解決につながるのです。

ちなみに、今、(原田 2007: 280)と書きましたが、これは原田さんが二〇〇七年に書いた文章の二八〇ページという意味です。その文章が何なのかは、巻末の参考文献リストを見るとわかります(『水俣への回帰』という本です)<sup>注3</sup>。アカデミックな世界で使われるこの表記法は、覚えておくと便利です。というのも、どこか一カ所にまとめて文献の書誌情報を書いておけば、あとは、自分のノートでも何でも、引用したところには(原田 2007: 280)とだけ書けばよいからです。

さて、市民みずからが調査すると言っても、もちろんそれは、専門家を排除するものではありません。あとでたくさん紹介するように、専門家が書いたものは大いに利用する必要がありますし、専門家の知識は大いに活用します。市民からすれば、それ自体が「調査」なのです。

専門家が提示する「知」を、私たち市民の側からもう一度組み立て直し、専門家集団のためではない、国家のためでもない、私

たち自身の「知」を作り出していく。それが市民にとっての「調査」です。

しかし、専門家の「知」を再構成しただけでは、私たちが知りたいことについてわからないことも少なくありません。<sup>⑦</sup>そのときは、私たち自身がデータをとってくる、つまり調べてくる、ということが必要になってきます。

この本では、そのように、自分たち自身が足でデータをとってくる、専門家が報告したものを集める、あるいは、自分で観察や測定をする、といった幅広い「調査」の方法について、解説していきたいと思えます。

しかし、そういうことは本来、新聞やテレビなどマスメディアの役割じゃないのか、と思う人もいるかもしれません。しかし、そこまでマスメディアに期待できるでしょうか。じつのところ、何か魔法のような技術がマスメディアにあるわけではありません。えてして私たちは「大事な問題なのにメディアが伝えてくれなかった」と言いがちですが、考えてみると、メディアが伝えてくれない、ではなく、自分たちで調べよう、となってもよいのです。

じつは、自分たちで調べることのメリットの一つは、マスメディアが流す情報についても、どこまでが信頼できるのかについて、少しわかるようになることです。実際マスメディアからの情報は、たいへん正確なものから、そうでないものまで、<sup>注4</sup>玉石混淆です。調査の技術を身につけることで、その玉石混淆の度合いが少し見えてもきます。

では、具体的にどう調査すればよいのでしょうか。

「調査」という言葉からイメージするのは、人によって違うかもしれませんが、いわゆるアンケート調査を思い浮かべる人、何か機器を使って測定するようなものを思い浮かべる人、誰か人に話を聞くような調査を思い浮かべる人、いろいろでしょう。

それはすべて確かに調査と言えるのですが、調査の範囲はさらに広く考えてよいでしょう。この本で扱うのは、広い意味での「調べる」こと全般です。

市民による調査は、手法や対象があらかじめ決まっている専門家による調査ではありませんので、この手法でなければならぬ、というものはもちろんありません。いわば、なんでもありです。しかし、「なんでもあり」だからといって「なんでもいい」わけではありません。どんな「なんでもあり」があるのか、それぞれの調査手法の向き不向きは何か、などを考える必要があります。

市民による調査は、たいてい一つの調査手法だけでは完結しないものです。<sup>⑧</sup>複数の調査手法を組み合わせることが必要になってきます。この点も、じつは専門家による調査よりも優位に立つ可能性はあるゆえんです。この課題については、まずこの調査を行い、次にこの調査とこの調査を行う、といった組み立て方で調査を行う、それぞれの調査でわかる範囲はこういうこと、それでもわからない範囲はこういうこと、といった「調査のデザイン」が重要になってきます。

この本全体で詳しく説明していきますが、あらかじめ見取り図を描いておくと、調査には大きく六つあります。まず、統計調査、質問紙調査(アンケート調査)、測定の三つで、これらは「量的調査(定量調査)」に分類できます。量的調査とは「数字」(数値データ)を集めてくる調査ということです。残り三つは、文献・資料調査、聞き取り調査、そして観察で、これらは「質的調査(定性調査)」と呼ばれます。

量的調査が数字(数値データ、量的データ)を集めてくるものだとなれば、質的調査とは、数字以外のものを集めてくる調査です。数字以外のものとは何かというと、そのほとんどは「言葉」を集めてくるものです。質的調査は「言葉」(文字データ、質的データ)を集める調査だと、とりあえず、言っただけでしょう。

<sup>注5</sup>表1・1のように、それぞれの三つは対称関係にあり、書かれた数字を集めてくるのが統計調査、書かれた言葉を集めてくるのが文献・資料調査、書かれていない生の数字を人びとから集めてくるのが質問紙調査、書かれていない生の言葉を人びとから集めてくるのが聞き取り調査です。質問紙調査は、人びとから直接数字を集めるのではなく、人びとに簡単な質問をしていって、それを「1」と答えた人何人、「3」と答えた人何人、と数字に変換していく方法です。そして、聞くのではなく、見て(あるいは機器を使って)数字を集めてくるのが測定(交通量調査や降雨量測定などを思い浮かべてください)、見て言葉を集めてくるのが観察です。観察は、たとえば、ある人びとの集まりのなかに入れてもらい、そこで様子をうかがい、言葉で記録する、といった調査方法です。この六つの調査類型を頭に入れたうえで、ちょっと練習問題を考えてみましょう。

### 【練習問題1】

自分が暮らす町の子育て支援の課題について、調査し、報告をしてください。

さあ、どこから手を付ければよいでしょうか。まず、「子育て支援」とは何を指しているのか考えてみましょう。「子育て支援」と言ったときに、ある人は子育てサークルをイメージし、ある人は待機児童問題をイメージするかもしれません。乳児の段階での支援もあるでしょうし、小学校入学前くらいの段階での支援もあるでしょう。共働き世帯かどうかでも、必要としている支援は違うかもしれません。

練習問題はとくに子育て支援のどういう側面と絞っていないので、まずは、子育て支援全体について調べる必要があるでしょう。

たとえば役場の担当部署や子育て支援センターなどに行つて、全体的なことを聞くところから始めてもいいかもしれませんし、あるいは、何か入門書で子育て支援の概括的なものについて知識を仕入れてもいいかもしれません。

そのうえで、より詳しく調べようとすると、いろいろな方法が思い浮かびます。子育て中の母親や父親に話を聞く、保育園や幼稚園の先生に話を聞く、子育て支援のNPOなどがあればそこに話を聞く。あるいは、どのくらいの世帯が子育て世代で、かつそのうちのどれくらいが共働きなのか、などを統計で調べてみる(そういう統計があるのかどうかを含めて)。また、自分の町以外のところで、何か先進的な子育て支援をしているところがあればそれを調べる。たとえば、新聞記事のデータベース<sup>注6</sup>でそれを調べてみる。あるいは、そうした事例を紹介したレポートを探して読んでみる。また、実際に子育てサークルの会合に出てみて、経験してみたり、グループインタビューしてみたりする。

そういう「調査」をどんな順番でどんな組み合わせで行つていけばよいかを考え、順番にやつていく、ということが必要になってきます。とはいえ、最初からはっきりした組み合わせや順番を決めることはむずかしいですし、その必要もありません。おおざっぱな方針を決めておいて、やりながら柔軟に方法を変えていくということも必要になってきます。調べていくうちに、こういうことも調べないといけないということがわかり、当初の予定を変更して、その調査を次に行う、ということも出てきます。

どんな調査をどんなふうに組み合わせればよいかは、考えたい対象、考えたいテーマによりますし、柔軟に変更しながら実施すべきです。しかし、いずれにせよ、いろいろな調査の方法を頭に入れておけば、そのどれとどれをどう組み合わせればよいかが見えてきます。

(宮内泰介・上田昌文『実践 自分で調べる技術』による)

注

- 1 所詮……結局。つまるところ。
- 2 水俣病……有機水銀中毒による神経疾患。四肢の感覚障害・運動失調・言語障害・ふるえなどを起こし、重傷では死亡する。
- 3 アカデミック……純粋に学問的なこと。学究的。
- 4 玉石混淆……すぐれたものとつまらないものが入りまじつて区別がないこと。
- 5 表1・1……省略。
- 6 データベース……系統的に整理・管理された情報の集まり。

問一 【ア】く【オ】は文章の順序が違っています。論理的に正しい順序に並べかえて、記号で答えなさい。

問二 a く e に入れるのに最適な語を、それぞれ次のア～カの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同一の語を二度以上用いないこととします。

- ア さらに    イ たとえば    ウ ところが    エ なぜなら    オ むしろ    カ もちろん

問三 ——線部①「しりごみ」・③「二番煎じ」・⑥「風通し」の意味として最適なものを、それぞれ次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- |          |  |   |            |   |             |   |            |
|----------|--|---|------------|---|-------------|---|------------|
| ① 「しりごみ」 |  | ア | あわてること     | イ | 居直ること       | ウ | 落ち着かなくなること |
|          |  | エ | ためらうこと     | オ | 面倒に思うこと     |   |            |
| ③ 「二番煎じ」 |  | ア | 再構成したもの    | イ | 新味のないもの     | ウ | 繰り返されたもの   |
|          |  | エ | 不必要なもの     | オ | 無意味なもの      |   |            |
| ⑥ 「風通し」  |  | ア | 新しいやり方や考え方 | イ | 意思や情報の通い具合  | ウ | 公平で正しい取り扱い |
|          |  | エ | 状況に応じた柔軟さ  | オ | 物事のはずみ、なりゆき |   |            |

問四 — 線部②「それはどうすればできるでしょうか」について、次の(1)・(2)の問いに答えなさい。

(1) 「それ」が指す内容を本文中から三十一字で抜き出して答えなさい。ただし、句読点・カギカッコなどの符号を含む場合は一字と数えます。

(2) (1)が可能となるための条件の説明として最適なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「調査」が、私たちが何かをするときに、どういったものをもとにして行動しているかを明らかにするものであること。  
 イ 「調査」が、社会がかかえている問題を解決する、私たちがより安心して暮らせる社会をめざすためのものであること。  
 ウ 「調査」が、あまりにも複雑になってしまったこの世界の問題を単純化し、健全な社会を取り戻そうとするものであること。  
 エ 「調査」が、巨大になった国家を全体として動かししている、複雑な制度やしきみをわかりやすくするためのものであること。  
 オ 「調査」が、より細分化された専門領域で議論になっていること、わからないことを、追求しようとするものであること。

問五 — 線部④「市民による調査こそが、ある意味、本当の調査研究ではないか」とありますが、「市民による調査こそが、ある意味、本当の調査研究」である理由としてふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 市民による調査は、調査をする人と問題を解決しようとする人が異なるため、客観的に検証できるから。  
 イ 市民による調査は、専門家が追求する専門領域のなかでの「正しさ」「厳密さ」を意味あるものに変えるから。  
 ウ 市民による調査は、困難を抱えた複雑さをときほぐすための「ちゃんと調べる」ための道筋を持っているから。  
 エ 市民による調査は、社会を直接相手にするため、専門家の調査が間違っていることを検証することができるから。  
 オ 市民による調査は、自分たちの生活や社会にとって必要なことを調査し、具体的な解決策をめざすものであるから。

問六 — 線部⑤「水俣病」について原田正純さんが語ったことから、筆者はどのようなことを言おうとしているのですか。解答用紙の「……ということ。」につながる形で、本文中から四十二字で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。ただし、句読点・カギカッコなどの符号を含む場合は一字と数えます。

問七 — 線部⑦「そのときは、私たち自身がデータをとってくる、つまり調べてくる、ということが必要になってきます」とありますが、「データをと」ることで、どういうことが可能になるのですか。その説明として最適なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 専門家の「知」と市民の「知」を組み合わせることで、自分で観察・測定するという幅広い調査の方法を身につけること。  
 イ 専門家が提示する「知」を、多くの市民に知らせることで、マスメディアによる玉石混濁な情報を整理すること。  
 ウ 専門家が報告したものを集めることで、新聞やテレビなどマスメディアが伝える情報をより深く理解していくこと。  
 エ 知りたいことを調べることによって、メディアが流す情報についてどこまで信用できるかがわかるようになること。  
 オ 知りたいことについてわからないことがあることに気づくことによって、専門家を利用しようと思いつくこと。

問八 — 線部⑧「複数の調査手法を組み合わせること」を言い換えた別の表現を、本文中から九字で抜き出して答えなさい。ただし、句読点・カギカッコなどの符号を含む場合は一字と数えます。

問九 筆者は、本文中で六つの調査方法を挙げています。——線部⑨「何か入門書で子育て支援の概括的なものについて知識を入れ」る、⑩「子育て中の母親や父親に話を聞く」、⑪「実際に子育てサークルの会合に出てみて、経験してみ」るは、それぞれ何という調査ですか。本文中の言葉を抜き出して答えなさい。

問十 次のア～クの中から本文の内容にあうものを二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 私たちが直面するさまざまな問題、社会全体で解決しなければならぬ問題を考えるためには、調査が大いに武器になる。
- イ ちゃんと調べてもわからないことが多く、的外れの解決策を提示することで問題をさらにこじらせてしまうことが多々ある。
- ウ 正確なことを調べるのは難しいので、調査は大学の先生や研究所の研究者など専門家に任せた方がよいと考える人が多い。
- エ 市民による調査は社会を直接相手に行われるが、「正しさ」「厳密さ」は最終的に専門家によって検証されるしかない。
- オ 福島第一原発事故が水俣病の繰り返しであることは、専門家集団による調査ではなく、市民による調査で明らかになった。
- カ 市民による調査は、複数の調査手法の組み合わせが必要になる点でも、専門家による調査よりも優位に立つ可能性がある。
- キ 書かれていない生の数字を直接人びとから集めてくる聞き取り調査は、「質的調査」ではなく「量的調査」に分類される。
- ク 最初からはつきりした組み合わせや順番を決めて調査することは難しいが、調査の途中で当初の予定を変更してはいけない。

問十一 次の会話は、あやかさん、みゆさんが本文の読後感を話し合ったものです。この会話を読んで、後の問いⅠ・Ⅱに答えなさい。

あやか ささまざまな問題を抱えているこの世界で生きていくために、市民による「調査」がとても大切だと筆者は言っているね。

本文中で紹介されている原田正純さんのエピソードも、市民による「調査」の大切さを物語っていると思う。

みゆ これまで、「調べる」とか「調査する」って、大学の先生とか、研究所の研究者とか、そういう人たちがするものだと  
思っていたけれど、ちがうんだね。

あやか そうだね。「調べる」ということは、実は私たちが生きていくうえで日常的に行っていることだからね。ただ、ふだん  
行っている「調べる」は不十分だったり、「調べる」ことで得られた情報が不正確だったりすることもあるから、「ちゃん  
んと調べる」ことが必要なんだ。

みゆ 「調べる」ための具体的な方法について、筆者は六つ挙げているけれど、例えば「日本全体で空き家は何戸あるか」に  
ついて「ちゃんと調べる」ためには、六つの中のどの方法で調べたらいいんだろう。

あやか まずは  X を行うのがいいと思うよ。その上で、さらにその原因などを調べたい場合には、違った方法で調べ  
るべきだね。筆者が言うように、この課題については、まずこの調査を行い、次にこの調査とこの調査を行う、といった  
組み立て方で調査を行う、それぞれの調査でわかる範囲はこういうこと、それでもわからない範囲はこういうこと、とい  
った「調査のデザイン」が重要だよ。

Ⅰ  X に入る、あなたが考える調査を次のア～カの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 統計調査
- イ 質問紙調査
- ウ 測定
- エ 文献・資料調査
- オ 聞き取り調査
- カ 観察

Ⅱ Ⅰの答えを選んだ理由を説明しなさい。